

千年の庭

牧師 山本 護



数年前の伝道所、夏の庭。樺はまだ頼りなげな幼木で、固い土壌を細粒化しようと蒔いたライ麦が穂をつけています。八ヶ岳山麓では昔、ライ麦が緑肥として用いられていたそうで、集会所の内壁ひと隅に塗り込んだ穂は開拓伝道の徴です。

自然界では、植物の生き残り戦略は動物のそれよりもずっと苛烈で、場合によっては他の植物を根

絶やしにしてしまう。とりわけ庭のような狭い領域では放っておくと、「多様な生態系」なんて美しいことを言っていられない偏った植生になってしまいます。

とはいえ、庭という小さな領域であっても、自然の大きな調和を実現したい。そのために草刈りや枝の剪定は慎重におこない、ゆえに随分手間がかかってしまいます。多様な植生をイメージし、はびこる草蔓、奥ゆかしい山野草を見きわめながら草払い機をふり回す。それでも幾年かの際に、滅びたり、思わぬ所に芽を出したり、以前はいなかった新顔も現れた。こちらの気遣いとは別に、植物が主体的に移動していることに感心させられます。このように書いてみると、教会の比喩のようで、苦笑してしまいました。

そんな苦笑の中から駄句ひとつ、「草木も楚々と動くや主の眼には」。伝道所の庭を広大なチベットに重ねてみると、植物の移動はカイラス山の周囲を五体投地に進む巡礼のテンポくらいでしょうか。教会の歴史は人間が計りやすい感覚で捉えがちだけれども、長い目で見ると草木の速度で、淡々と、延々と進み往く巡礼のごとくです。

「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のよう(Ⅱペトロ 3:8)」。いつか主のもとで一日を過ごし、千年を過ごしている時には、私たちの教会の嵐や小春日和を静かに見守ることができるでしょう。いや、動物の時間で生きている今だって、沈黙して心を整えてみると、大きく生成変化している教会の姿を掴まえることができます。

「草木も楚々と動くや主の眼には」。そんな主のまなざしを、名を知らぬ草が刈られながら教えてくれました。Ω